

一其人其様而様皆特出于各人之嗜好、如好詩則李白觀瀑好國雅則小倉山莊家有見山之樓、則富士峯之類、候用意之纖悉懇到可見已鄰之不肖以濫吹亦辱在贈中、其陶令彈琴圖、蓋爲鄰癖子琴而作也、局之開也、二候愍其優待甚至暑時之冷麪紫神散、參葉湯、寒時之葛湯、湯餅、淨手湯、或以園蔬、或以時果柿柑、以時慰勞之、凡法書名畫、四時花艸、珍奇之物、有所致則出示之、此堅田侯之殊遇也、枇杷葉湯于夏醴羹湯腐于冬、佳茗之日給、風雨或少縮散限此宮川侯之恤且恕也、其侍校讐必茶之果之、別業花時、必借而遊焉、又必盃尊盤俎果餌以饗之、則二候不有所異也、其同者固同、其異者豈異乎哉、發乎待人之渥則一也爾、鄰有感于此因併錄、

〔泰平年表大御所〕文化九年十二月十九日、寛政諸家系譜御用相勤候ニ付、八丈縞十端松平伊豆守、御刀山城國廣金十五枚、堀田攝津守、同肥前國忠廣金十三枚、堀田豐前守於御前拜領之、同廿三日、系譜掛大目付、御目付、奥御右筆組頭、奥御右筆、其外系譜調方出役、御目見以上已下共於席々拜領物有之、御用政系譜集の事を奉り手傳は五山の碩學、其外林家書生相交り是を勤、是時家々より譜を奉る、万石以上已下は御目見以上計りなり、同二十年編集卒業、帙三百八十卷、是を寛永諸家系圖と云、其後寛政十一年正月十七日、堀田攝津守正敦朝臣願により寛永以來の系譜次御用被仰付、堀田豐前守正毅朝臣は正敦朝臣に差副御用相勤べしとの仰な蒙り、右懸り大目付壹人、御目付二人、奥御右筆組頭壹人、奥御右筆六人被仰付、是等は系譜撰の事にはあづからず、諸家の譜調進の事、取扱い拔ふ爲なり、諸家に命令下して新に系譜を奉る、此時兩邸に調所を設けられ、攝州御役屋敷にも書院二間、豊州やしきは表居間なり、御旗本の内、兩御番、大御番、小普請、又は兩御番の隠居部屋住の伴等、文筆有之者御撰、系譜書次取調御用被仰付、御目見以下席よりば數十人御撰、手傳に被仰付、年々人數相増、卒業の年に至ては四十八人なり、但兩邸に頭取二人、置れ、諸事を取扱ふ、其外にも訂正、校定、日記方、清書方、家尋方などいふ役あり、享和三年の春、寛永譜書次を止め、重修の體に改作也、文化九年十月に至りて重修系譜皆出來成帙一千五百三十卷、是を寛政重修諸家譜と名付らる、序文は正敦朝臣也、凡例目錄十卷を副らる、同十一月廿一日、羽目の間に並べ、御老中方御見分相濟、奥へ相廻し上覽の上、紅葉山御書庫へ收めらる、同十二月廿八日、寛政副本書寫御用被仰付、御用濟の内より右出役被仰付、是迄の出役なり、同十二年十月、副本淨書御用相勤、尤右見廻御用西丸新番組頭壹人、西丸御小性組壹人被仰付、是之後、日光山御神庫へ御老中方御見分相成、